

第1回高齢者等が一人でも安心して暮らせるコミュニティづくり推進会議における主な論点

区 分	主 な 論 点
<p>孤立死の実態等に関する意見</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 戦後焼け野原の日本から現在の繁栄を築く礎となってくれた高齢者の、家族や人に迷惑をかけたくないという気持ちから、世話を受けない、ケアを拒否するという態度はある意味で尊いことである。実際に孤立死した人はケアが非常に少ない。 ○ UR都市再生機構の約1,800団地、77万戸のデータでは、平成11年から18年で孤独死は倍増しており、63%が高齢者だが、30代、40代の男性の死亡事故も発生している。この増加傾向はしばらく続くのではないかと見ている。 ○ 新宿区の高齢化率は18.6%、ひとり暮らし高齢者率30%、このうち約4割が生活保護を受けている。孤独死者数は年間100人前後ではないかと推計している。 ○ 在宅介護においては、家族がいても対応が大変難しく、実際に親の介護において救急車を呼んだり、火事を起こしかけたり、家族を信用できずに鍵を変えていたため緊急時に入室できなかったり、危険な事態に陥ったことも度々あった。24時間見守っていなければならない、介護者の肉体的・精神的・経済的負担は非常に大きい。高齢者が一人でも安心して暮らせるようにするためには、介護する者の立場も含めて考えていかなければならない。また、メンタルなケアが一番重要であると思うが、個人の選択があり、見守られる高齢者がこうしたケアを受け入れてくれるかどうかはキーポイントである。

区 分	主 な 論 点
独居高齢者等に対する支援に関する意見	<ul style="list-style-type: none"> ○ 高齢者は、介護サービス以前の家事や見守りサービスなどのサポートを必要としている。また、高齢者住宅に必要なサービスとしては「万ーの場合の受け皿」や「介護とサービス」の前に見守りが必要とされている。 ○ ケアマネジャーがケアプランを作っていく際に感じることは、定期的なフォーマルなサービスに加えて、買い物やゴミ出しなどにおけるインフォーマルな小さな支援も重要であり、そうした支援がないと生活の基盤が不安定になってくる。 ○ UR都市再生機構の団地においては、団地自治会、住宅管理協会、日本総合住生活がそれぞれ安心登録カード、安心コール、ごみ出しサービスなど的高齢者見守りサービスを希望者に対して提供している。 ○ 自治会は包括的な住民自治組織であり、相互扶助の精神に基づいて、防犯・防災の観点からも人情の機微を大事にしながら独居高齢者の状態を把握し、見守りをを行っている。 ○ 高層住宅管理業協会は、昨年、業界団体として約5,000名の認知症サポーターを育成し、今年度は認知症サポーターに加え、認知症キャラバン・メイト養成研修も開催する予定である。また、協会の内部事業として高齢者の増加と独居高齢者の増加への対応について調査・研究しているところである。 ○ 千葉県では、孤独死対策として平成18年度からシンポジウムの開催と市町村でのモデル事業を実施している。松戸市の常盤平団地では以前から独自に積極的な取り組みが行われてきたが、他の市町村でも実態調査を行った上、それぞれの事情に応じた実践的な取り組みを行っている。

区 分	主 な 論 点
	<ul style="list-style-type: none"> ○ 新宿区には高齢化率が非常に高い都営団地が複数あり、平成18年度に週4回のごみの収集で3回続けて出てなかったら地域包括支援センターに連絡するというモデル事業を実施し、今後これを拡大していく。また、孤独死を考えるシンポジウムを開催するとともに、ひとり暮らしの高齢者をリストアップし、情報紙を訪問配布する形での見守り事業を手挙げ方式ではない手法（おせっかいやき事業）で行っている。 ○ 旭川消防本部では、災害弱者支援事業として緊急通報システムのほかに、高齢者への「ほのぼの電話」、「ほのぼの訪問」、「ほのぼの手助け」、「ほのぼのグッズ」の提供等を平成6年から行っている。また、平成15年からは高齢者の家庭を訪問し、血圧等のバイタルサインを測定し、カメラの付いたパソコンにより、署にいる保健師資格を持った女性消防職員から相対的健康相談を受けるなどの「あんしん訪問」を実施している。こうした事業は高齢者世帯に大変好評で、防火、防災だけでなく孤立防止の支援策にもなるのではないかと考えている。
地域コミュニティ、地域ネットワーク等に関する意見	<ul style="list-style-type: none"> ○ 行政などによる施策が全くなかった時代の方がむしろ人間的なコミュニティや支え合いがあったが、近年この支え合いがかえって希薄になってきている。専門職に任せるだけでなく、現場のコミュニケーションを密にすることにより、社会として、地域住民が皆でこうした高齢者等を支えることが大事な視点である。 ○ 人は年を取ると体や頭の衰えなど不安が多くなり、自分の殻に閉じこもったり、孤立しがちで、やるせなさや寂しさを感じるものだが、老人クラブは、若い世代にできるだけ迷惑をかけないように、会員同士自助・共助で助け合い、活動している。見守りについても、格式ばった家庭訪問という形ではなく、隣近所の友人として、友愛活動として、病気や災害の安否確認をしている。 ○ 単身高齢者の3分の1は借家居住であり、これはほとんど「希薄な地域との繋がり」を意味し、その先の居住も不安定であり、様々な人生のプロセスの中で地域との繋がりを作れなかったという事情を抱えている人が非常に多い。

区 分	主 な 論 点
	<ul style="list-style-type: none"> ○ 見守りや安否確認においても、最近では民間事業者の通報システムやふれあいペンダント、徘徊者に対する探知機なども積極的に取り入れられているが、うまく使いこなせていない状況もある。本人の近隣者との付き合いの度合いによってアプローチや支援の仕方が異なってくる。 ○ 社会福祉協議会は、食事サービス、移動サービス、小地域ネットワーク活動、ふれあい・いきいきサロン、小規模多機能型居宅介護の運営などを住民の活動をお手伝いする立場で行っている。自治会が基盤を支えないと地域とのコミュニティは作れないし、老人クラブはボランティアの主力メンバーで、民生委員・児童委員が地域内でそれぞれのインフォーマルメンバーと組みながら全体を見るような形になっているのではないかと考えている。 ○ 「小地域ネットワーク」は要援護者を対象とした見守りだけではなく、人間関係づくり、緊急対応や生活支援、場合によっては専門職につなぐことも含めた相談機能、連絡調整機能も持っている。「ふれあい・いきいきサロン」は利用者もボランティアも一緒に楽しい時間を過ごす場であるが、実際には相当な見守り機能、相談機能を持っている。孤立防止ひいては孤立死防止ということになるとこうした活動の密度をもっと上げていかなければならない。また、住民活動と、施策、企業の取組みなどいろんなものを組み合わせしていく必要がある。 ○ 最近、やはりコミュニティが壊れており、地域とのつながりもかなり希薄になっている。今後、町内会、自治会が地域の諸集団を束ねる役割を果たさなければならぬと考えている。安全、安心のネットワークの中に孤独死の防止も盛り込んでいく必要がある。それぞれの団体が連携を取りながら地域活動をもっと活発にしていき、孤独死の防止に取り組んでいかなければならない。 ○ 今年民生委員制度創設90周年を迎え、採択した行動宣言には「地域社会での孤立・孤独をなくす運動を提案し行動します」、「日頃の活動を活かし、災害時に要援護者の安否確認を行います」が謳われ、行政や社会福祉協議会、自治会、ボランティアなど関係機関・団体との密接なつながりを増して、専門職や福祉の実践者との連携・協働を図り、地域住民を支える活動を行っている。

区 分	主 な 論 点
地域包括支援センター、ケアマネージャー等に関する意見	<ul style="list-style-type: none"> ○ 本人が何を目的としたいのか、例えば、家族と一緒にいたい、住み慣れた地域で住み続けたいということを経営者など医療や介護の専門職が本人の意志を引き出すことが重要である。 ○ 地域包括支援センターは日常生活圏をマネジメントする主体だが、実際には地理的空間、都市的空間を念頭において、ネットワークから外れた人、作れなかった人をどうつなげていくかが課題である。 ○ 最近、自治会や民生委員の方々が、自分達の地域の問題と感じて活動が始まり、一緒にやっという機運は高まっている。ただ、従来からの在宅介護支援センターの安否確認の訪問が在宅介護支援センターで継続されていたり、地域包括支援センターが引き継いでいるところがあれば、ケアマネージャーに委ねられているところもあり、そのつながりがきちんとできているかどうか研修や周知徹底を図ることが重要である。 ○ 要介護認定が出るまでの期間に空白部分ができてしまっており、その2、3か月間のフォローやサポートが難しい。
その他の意見	<ul style="list-style-type: none"> ○ 高齢者世帯で一人が亡くなった場合に残された家族に対するブリーフケアとして、月に1回訪問するなどのサポートをしているが、こうした小さいが日常的な支援も重要になってくる。 ○ 安心登録カードに関しては、機構は緊急連絡先等の情報を住宅管理上保有しているが、個人情報保護法の関係でこれを団地自治会に提供することはできないという事情がある。